ワールド
異世界式教育エージェント
ティーチャー
著/ネコ光一
イラスト/Nardack
アニメイト限定4Pリーフレット

体験訓練

ミラ教の騒動が解決してから数日後……。

今日も日課である訓練をしようと神殿の中庭に集まっていると、元聖騎士が己の弟子であるクリスを連れてやってきた。

「少し頼みたい事があるのだが、この子を君たちの訓練に参加させてやってくれないか？」

元聖騎士は用事があって出掛けるそうなので、その間だけクリスを預かってほしいとの事だ。

特に断る理由もないし、クリスとは先日紹介されてすでに顔馴染みなので、俺たちはクリスを加えて訓練を始める事になった。

「皆さん、よろしくお願いします！」

「ああ、厳しくいくから覚悟しておくんだぞ」

アシェリーを守る聖騎士を目指す、クリスの覚悟とやる気は十分理解している。

というわけで加減はしないと告げれば、望むところだと言わんばかりにクリスは拳を握っていた。

「いい気迫だな。けど、兄貴の訓練はきついぜ？」

「どんなにきつくても耐えてみせますよ。俺はあの人に毎日鍛えられていますから！」

「やる気があるのは結構だな。じゃあ、まずは軽く走るとするか」

町を一周してから戻ってくる、いつもと比べたら短いコースだが、神殿が山の上にあるので、上り下りするだけで程良い運動となるだろう。

もっと実戦的な事をすると思っていたのか、少し拍子抜けな表情をするクリスだが、準備をするレウスを見て何かが違うと気付いたようだ。

「レウスさん。それ……何ですか？」

「何って、重りだよ？」

砂がたっぷり詰まったリュックに、手足に重そうなバンドを次々と身に着けるレウスの姿に、クリスは困惑し始めているようだ。

場所によっては鎧を着たまま走る話もあるが、レウスは動きを阻害するような防具を装備しないので、これくらいがちょうどいいのである。それでも全ての重量を合わせれば、五十キロは軽く超えている筈だ。

「でも、軽くって……」

「その後の訓練に比べたらに決まっているだろ？　だってこれは走るだけだし」

「走るだけでは駄目ですよ。きちんと己の動きを意識し、適した走りを維持する事を心掛けるのです」

「もしかして、エミリアさんのも……」

「従者として体力は必要ですから。もちろんレウスに比べたら軽いですけど」

手足に重りを着けて飛び跳ねるエミリアに、クリスの冷や汗が止まらないようである。

「じゃあ、リースさんとフィアさんも……」

「私たちのはそんなに重たくはないよ」

「試しに持ってみる？」

遠距離から魔法が主な二人だが、いざという時に備えて持久力を鍛えておきたいからな。

最後に、何も身に着けていない俺を見てクリスは首を傾げていた。

そんなクリスが何を考えているのか察したのだろう、レウスが隣に立って説明していた。

「勘違いしているみたいだから言うけどさ、兄貴が一番きついんだぞ？」

「でも、何も着けていないですし……」

「ああ見えて、魔力で体中に重りのようなものを着けているんだ。きつさなら、俺より上だぞ？」

魔力で身体能力を上げる『ブースト』の方向性を変えて、まるで水の中にいるような抵抗を疑似的に作り出しているのである。

常に魔力を消耗する上に体全体へ負荷をかけているので、心身共に鍛えられるわけだ。その分魔力の制御が非常に難しいので、体の構造に詳しい俺しか出来なかったりする。

「あの……俺も何か着けた方がいいのでしょうか？」

「クリスは初めてだから付いてくる事だけを考えておけ。走り終わってからが本番だからな」

「は、はい……」

最初の意気込みが大分萎んでいるが、クリスは何とか己を奮い立たせて走り出した。
そして走り終わった後は……。
「次は模擬戦だな。レウスを敵だと思って存分に打ち込め」
「はぁ……はぁ……はい！」
「次はホクトと模擬戦だ。魔物との戦いに慣れておくのも必要だからな」
「は、はいぃ……」
「ついでに素手による崖登りも体験しておこうか。体だけじゃなく心も鍛えられるぞ」
「……はひぃ!?」
「最後は俺と模擬戦だ。限界を超えてみせろ」
「ひぃっ!?」
それから夕方になり、元聖騎士が戻ってきた。
「……ずいぶんと、しごかれたようだな」
俺とリースの手によって体力は回復しても、精神が回復する筈もなく……。
「……オカエリナサイ」
クリスは真っ白に燃え尽きていた。
「大丈夫、クリス君？」
「へ、平気さ！ アシェリーの顔を見たら元気満々だ！」
……が、気力だけは即座に回復していた。
今の俺が言うのも変かもしれないが、若さって素晴らしいものである。

NOT FOR SALE
©ネコ光一／オーバーラップ　イラスト：Nardack